主の復活を知らされた女性たち

ルカ２４：１－１０

司祭　ヨハネ 井田　泉

2022 年 4 月 17 日
復活日

彦根聖愛教会にて

週の初めの日、つまり日曜日の明け方早く、女の人たちは準備しておいた香料を持ってイエスの墓に行きました。十字架に死んで葬られた、汚れたままのイエスのお体をせめてもきれいにしてあげなければと思ったのでしょう。

ところが女の人たちが墓に行ってみると、入り口を塞いであった石はわきに転がされており、中に入ったところイエスのご遺体がありませんでした。途方にくれていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れました。彼女たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言いました。

「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。」ルカ 24:5

イエスは生きておられる、と言うのです。

お墓に行ってイエスの復活を聞かされたこの女の人たちとは、どのような人たちだったのか。それを今日は確かめたいと思います。

イエスと同じくガリラヤ出身の女の人たちが多数、イエスに従っていました。ルカ福音書第８章にはこのように書かれています。

「イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。」8:1

その後です。

「悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人

たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」

8:2-3

イエスに従った女の人たち。具体的にここには、「マグダラのマリア」「ヨハナ」「スサンナ」と 3 人の名前が挙げられています。さらに**「多くの婦人たち」**とも記されています。イエスに従う群れには、5 人、10 人、20 人……数はわかりませんがたくさんの女の人たちがいた。

それぞれに病や苦しみ、大きな困難を抱えていてイエスに救われた人たち、イエスの神の国の福音に強く引きつけられてイエスについて行こうと決意した人たちです。イエスとの出会いから、彼女たちの新しい人生が始まりました。漠然とした大衆ではありません。それぞれに固有の名前と顔と個性をもった一人一人の集まりです。イエスに従うことを決意した人たちです。

重要なことは、女性の地位が極めて低く、公的な役割を担えなかったその時代に、彼女たちがイエスの群れの中で積極的な役割を果たしていることです。

「彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」8:2

ただイエスに救われて受け身のままだったのではなく、イエスの愛と教えに動かされて、自分の持っている物と力を提供し、イエスの一行に積極的に参加、奉仕していた。言い換えれば、この女の人たちが、イエスの宣教活動を物質的にも精神的にも支えていたのです。彼女たちには喜びがありました。

さてこの女の人たちは、イエスの身に迫る危険を感じつつ、イエスの最後のエルサレム入城に従いました。彼女たちはすでにイエスの受難予告を聞いて心配していたと同時に、ある種の覚悟をしていたでしょうから、群衆の熱狂的なイエスへの歓呼の叫びを聞いても、それに有頂天にはなりはしなかったでしょう。いよいよイエスが重大な危険に、はっきり言えば死に近づいておられることを感じて、どうしたらよいかはわからないままに、イエスのために心を砕いて祈っていたに違いありません。

数日して彼女たちの心配は現実となりました。イエスは捕らえられ、死刑場に連行されていきました。金曜日の朝のことです。自分がかけられる十字架の横木を背負わされてイエスが歩いて行くのを、彼女たちは群衆の中にまじって見つめながら、ついて行きました。

ルカ福音書は彼女たちの姿をはっきりと伝えています。

「民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエス

に従った。イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。『……わたしのために泣くな。……』」ルカ 23:27-28

「嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。」

彼女たちはどんなに嘆き悲しんだことでしょう。イエスは弱り果てながらも、自分に従ってくる彼女たちに気づかれました。イエスは振り向いて彼女たちを気遣って声をかけられました。

「わたしのために泣くな。……」

イエスは十字架にかけられ、午後 3 時頃、大声で叫ばれました。

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」23:46

このイエスの最期の声は、はっきりとこの女の人たちに届いたでしょう。こう記されています。

「見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。」23:48-49

男の弟子たちはどこにいるのでしょう。ここに立って、しっかりとイエスの最期を見つめて目に焼き付けているのは、ガリラヤから来た女の人たちなのです。彼女たちは確信しています。イエスは悪いことをしたから捕らえられて処刑されたのではな

い。神さまに従い、人々を、とりわけ弱い立場の人たちを愛して正しいことをされたからこそ、捕らえられて処刑されたのだと。**「遠くに立って」**とありますが、立入制限があって距離的には遠かったのかもしれません。しかし思いにおいては、精神においては、彼女たちはイエスの間近にいた。イエスと思いと志を一つにしてしっかりと立っていたのです。

しばしばわたしたちは、十字架のイエスを嘲った人たちのことを想像します。しかしそういう人たちをかき分けて、イエスの受難と死を嘆く人たちを見つめなくてはなりません。わたしたちはどちらか。わたしたちはイエスを信じ、イエスの受難を嘆く者たちなのです。

さてイエスが十字架に息を引き取られて、十字架らから降ろされ、葬られる場面について、こう記されています。

「イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスの遺体が納められている有様とを見届け、家に帰って、香料と香油を準備した。」23:55-56

この女の人たちは、イエスの死を見て、それで解散したのではありません。イエスのご遺体を運ぶアリマタヤのヨセフの後について行き、墓とご遺体がそこに納められる様子まで見届けた。お墓までイエスに従った。それほどにイエスを愛していた

のです。彼女たちは家に帰って、香料と香油を準備します。イエスをきれいに葬りなおすためです。

イエスの墓に行った女の人たちとはどういう人たちだったか。これまで確かめたように、それは、(1) 生前のイエスに従って一行に奉仕し、(2) 十字架にもとに至るまでイエスに従い、そして (3) 墓まで行ってイエスの葬りを見届けた人たちでした。

彼女たちは日曜日の朝早く、香料を用意してイエスの墓に来ました。今日の箇所です。

輝く衣を着た二人の人が彼女らに言います。

「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」24:5-7

「婦人たちはイエスの言葉を思い出した。」24:8

彼女たちは生前のイエスの言葉を思い出しました。現実に起こった痛ましいことは、イエスが先に予告しておられたことだった。

輝く衣を着た二人の人が彼女らに言います。

「復活なさったのだ」

死んだけれども、殺されたけれども、イエスは復活して生きておられるという。

彼女たちは、恐れつつ、惑いつつ、なぜかかすかにうれしい。小さな、しかし確かな喜びが、心に体に湧いてきます。まだ復活の主と出会っていません。けれども彼女たちのそばに、復活のイエスはもう来ておられる。間もなく、彼女たちは驚きと喜びの再会を果たすのです。イエスは生きておられる。彼女たちを愛するがゆえに、イエスは死んだままでいるわけにはいかないのです。

わたしたちも聞きます。「イエスは復活されたのだ」と。

あるいはわたしたちもまだ明確に復活のイエスさまと出会っていないかもしれません。しかしイエスはわたしたちに会おうとして近くに来ておられる。わたしたちも、ある時からイエスに従った。苦しみも困難も迷いも抱えつつ、十字架の主を見つめようとしてきた。そのわたしたちを復活のイエスはすでに見出しておられ、わたしたちに出会おうとしておられます。

主なる神さま、主イエスが復活して、今、わたしたちのために生きておられることに、わたしたちの目を開かせてください。十字架に死んで復活された主イエスのみ名を賛美します。アーメン